

談話室

化学屋の応用昆虫学(?)研究

かざのひかる
風野光

はじめに

大学の園芸学部農芸化学科を卒業した私は、1959（昭和34）年4月に当時の農業技術研究所病理昆虫部農薬科に採用された。大学での専攻は応用微生物であったが、進学先として農学系を選んだ動機はかなり不純なものである。すなわち、文系より理系に進みたいが数学や物理学はあまり得意ではない、そして太平洋戦争開始から終戦後数年間経験した食糧不足が今後あっても、農学系へ進めば何とか食えるのではないかと考えたからである。

I 農業技術研究所～農業環境技術研究所

農技研の農薬科における主な仕事は殺虫試験用の昆虫を増やし、それを薬剤によって殺すという作業であったといっても過言ではない。手がけた昆虫はアズキゾウムシ、イエバエ、スジマダラメイガに始まって、ニカメイガ、ツマグロヨコバイ、ヒメトビウンカ、トビイロウンカ、セジロウンカ、アブラムシ類、ハスモンヨトウ等、また、九州農業試験場に移動してからはコブノメイガ、ミナミキイロアザミウマが加わった。

これらの昆虫は実験室で経代増殖して実験に供したものが多く、他の試験研究機関にお願いして頂戴したものもある。その一つにニカメイガがあったが、西ヶ原から当時上尾市内にあった依頼先の埼玉県農業試験場への電話を申し込んだところ、特急では1時間で繋がるが普通では6時間程度かかりますと言われたことを思い出す。西ヶ原から電車とバスを乗り継いで2時間もかからないところへの電話が6時間とは!! 電話サービスはその後次々に進歩して、現在では研究室から外国の研究室へ直接話ができるほどになったことを考えるとまさに隔世の感がある。

農技研に採用された頃は米の収穫量が6千万石ほどで、基本的に日本人の需要量を満たすことができない状態であったが、その後1,200万トンほど穫れるようになって減反政策が施行されるようになった。上中里駅を降りて試験場まで行く途中に平塚神社があり、その宮司の息子さんが高校の同級生で、出・退勤の際に立ち話することがあった。丁度筑波移転が具体化したころのあ

る日その友人に会ったところ、「そのうちに移転だそうだね。農業総合研究所（現在の農林政策研究所）は移転しないんだって?」ところで、農技研と総研の違いはなんだい?と聞かれた。そのときの私の答えは「米が余っても増産の研究するのが農技研、余った米をどうするかについて研究するのが総研」と言って友人を煙に巻いた。

米がこのように増産傾向に転じた理由の一つに早期栽培、早植え栽培の普及がある。それに伴ってツマグロヨコバイ、ヒメトビウンカによるウイルス病の発生が多くなり、これら媒介虫の防除が重要課題であった。また、トビイロウンカによる坪枯れも特に西日本では毎年のように発生し、大きな問題であった。したがってウンカ・ヨコバイ類の防除、薬剤抵抗性関連の研究は農技研とその後転動した九州農試における主な仕事であった。なお、トビイロウンカによる坪枯れは関東地方では稀なことであったが、1965（昭和40）年には関東地方でも大発生があり、高木信一病理昆虫部長からぜひ見ておくと



図-1 西ヶ原の研究本館



図-2 農技研跡地の記念碑

Entomological Research by Pesticide Chemist. By Hikaru KAZANO

(キーワード：農薬研究，病虫害防除)

よいとの助言をいただき、岩田俊一室長のご自宅のある神奈川県秦野市の被害圃場を見る機会があった。この経験は九州農業試験場へ転勤した後の仕事に大変参考になった。

西ヶ原と農技研としての筑波移転、そして農業環境技術研究所への改組はあったものの同じ研究室に勤務したが、1984(昭和59)年3月に九州農業試験環境第一部に転勤した。このときの送別会で東野部長から「25年の長きにわたり」とのご挨拶を受け、あらためてそんなに長い期間であったのかと思った次第である。

II 九州農業試験場

九州農試ではウンカ・ヨコバイをはじめ、長距離移動性害虫の特別研究に参加した。九州農試の害虫・気象関係の研究室と各県の害虫防除関係の研究室が参画した大規模な研究であったが、成果の一つとして天気図の気圧配置からウンカ類の大規模移動を予測することが可能となった。なお、この研究はその後さらに発展して2004(平成16)年には気象研究所との共同研究の成果が発表されている。

九州地方ではトビイロウンカによる被害を毎年のように受けていたが、ある年九州以外ではそんなに被害は大きくなかったのに九州ではあちこちに坪枯れが見られたことがあった。農政局の会議に参加される湯嶋部長から、会議で見解を述べる必要があるが、その原因について私がどのように考えるか尋ねられたことがある。抵抗性の発達は防除を阻害する要因ではなく、兼業が多い農家では農作業は週末に行われることが多いが、その年は週末になると雨が降り、薬剤の効果が十分発揮できなかったことによるものであろうと報告した。また、時々研究室に相談を持ちかけられていたある農家から、お蔭様で被害が少なくて済んだとの電話を受けたことを思い出す。九州農試での研究生活は、野菜茶試への転勤を命じられたため4年とちょっとで離れなければならなかった。

試験用の昆虫を飼育したり、試験結果の観察のために週末にも試験場に行かなければならないことが結構頻繁にあったが、九州農試時代は試験場から車で30分以内



図-3 九州農試における研究室の田植え

のところに住んでいたので、子どもたちを連れ出して飼育している昆虫の餌の注水の手伝いをさせた。子どもたちは喜んで付いてきたが、休日の試験場に来る目的は別のところにあったようである。当時は現在ほど家庭にコンピューターが普及していなかったので、手伝いが終わってから研究室のそれを使ってゲームをすることのようであった。なお、農技研時代の私の室長であった浅川勝さんは、私と同様に西ヶ原の試験場にご子息を連れてこられたようで、あるとき「親父は試験場でムシと戯れている」とご子息にコメントされたと話しておられた。

III 野菜・茶業試験場

野菜茶試は蔬菜園芸と茶が研究対象であるが、普通作とはかなり違う場面があり、当初は会議に出席していても言葉の意味がわからないこともままあった。こんなときに頼りになるのは部の先輩、後輩諸氏で、いろいろとお世話になったものである。なお、先任の部長に引継ぎをお願いしたところ、重要なことはメモにしてあるので、その他のことは自分で判断して進めてくださいと言われ、いささか戸惑ったことも事実である。

IV 再び農業環境技術研究所

野菜茶試での勤務も2年余で終わり、農環研の企画連絡室に移動を命じられた。若いときに企画科の研究員や技術会議の研究調査官などの経験がない私にはかなり荷が重かったのは確かで、上司をはじめ企連室の方々、ひいては職員各位に迷惑をかけたことも多かったと反省している。

V 農業研究センター

農水省職員としての最後の勤めは農研センターの総合研究官で、土壌肥料や気象関係の研究も所掌範囲であったが、亀の甲より年の功で何とか勤めを果たせたと考えている。

VI 農水省を退職してから

農水省退官後はJICAの専門家としてフィリピンで農業モニタリング体制改善計画プロジェクトの実施・運営に携わったが、チームのメンバーが発展途上国でありがちな犯罪の被害を受けることもなく、また、チーム内のいざこざも皆無に近くプロジェクトを終了することができた。惜しむらくは相手国の諸事情もあり、当初想定していたプロジェクトのゴールに完全に達成することができなかった。しかし、残留分析の方法、農薬管理の方法について若干でも進歩が見られ、また、それが継承されていると漏れ聞いているので、彼の国でいつかはプロジェクトの成果が活かされることを願っている。

(文中職場名、登場人物の役職は当時の名称)